

八木健に学ぶ滑稽俳句 19

高橋 素子

鐘つけば銀杏ちるなり建長寺

夏目漱石

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

正岡子規

住宅地を一步出ると、火を焚くように彼岸花が、畦に群れ咲いていた。柿の実も真っ赤に熟れて、里はすっかり秋の色だ。「石山寺縁起絵巻」や紫式部が、「源氏物語」を執筆した事でも知られる、西国観音霊場三十三所第13番札所・石山寺の鐘の音が、かすかに聞こえて来る。寺は違えど、正に有名な子規の句の世界だ。

ところで、この子規の「柿くへば」の句が詠まれたふた月足らず前に、漱石の「鐘つけば」の句が、「海南新聞」に掲載されていたのは周知の事実だ。

子規は漱石の句にヒントを得たとも思われるが、この二つの句の関係についてどう考えるべきなのだろう。

師・八木健は「鐘を撞いて銀杏が散るのは当たり前です。柿を食って鐘が鳴るのは意外性があり、子規の句の方が、はるかに優れています」と、言う。「この様に何らかのヒントを得たとしても、原句をしのげば、その句の方が名句と言わざる得ません」と、続けられた。

そう言えば、「我が俳句仲間において、滑稽趣味を発揮して成功したの

は、漱石だ」と、子規が褒め称えた（墨汁一滴）漱石の名句にも似た句が江戸時代に詠まれていた。（太田南畝『一話一言』巻四十四）

たたかれて蚊を吐（ハク）昼の木魚哉 東柳

叩かれて昼の蚊を吐く木魚哉 夏目漱石

掲出の句にいたっては、語順が少し変わっただけと言えるが、同じ『一話一言』に下記の天弓の名句も記載されている。

秋の暮れあくびうつしに行にけり 天弓

永き日やあくびうつして分れ行く 夏目漱石

欠伸を移すと「三日の親戚」と言うそうだが、天弓の句は人恋しい秋の暮れに三日の親戚を求めて出歩いているのは面白い。

漱石の句は、春分を過ぎ、夜よりも昼の時間が長くなった日中、気持ちゆとりも出来、長話にも互いに飽きて、欠伸を移して別れたとの意。季節も句の意味も違って面白いが、やはり天弓の句から何らかのヒントを得たものと思われる。

同様に、名句と言われる句の類似句を捜して見る。

ひんぬいた大根（ダイロ）で道を教へられ 柳多留

大根引き大根で道を教へけり

小林一茶

掲出の一茶の句は、冬の田舎道で、畑で大根を引き抜いている男に道をたずねた。男はいま引き抜いたばかりの土のついたままの大根で、方向を示しながら、無造作に道を教えてくれたとの意であるが、川柳にも掲出の「ひんぬいた大根」の句が見られる。ほかにも、卑近な発想・季題の軽視・風刺的な傾向等、一茶の句には川柳的発想に近いものがかなり多く、俳諧と川柳の発想の基盤が、著しく近接してきたこの時代の傾向を、よく示していると、言われている。

高浜虚子により絶賛され、杉田久女の一大傑作と言われている「山時鳥」の名句にも、秋桜子の影響がみられると指摘されている。しかし、久女自身は、「自句自解」で、上五・中七はすらすら出来上がったが、下五がなかなか出て来ず、福岡・大分両県境にある英彦山に何度も通う内、「ほしいまま」の下五の五字を不意に思い付いたと、述べている。いずれにしても、この句が久女の一大傑作の名句であることに変わりはない。

鞆や春の山びこほしいまま

水原秋桜子

舂して山時鳥ほしいまま

杉田久女

最後に自ら「本歌取り」と言われる師の滑稽句を紹介しておこう。

春の海終日のたりのたりかな

与謝蕪村

怠けぐせ治らず春の海のたり

八木健

掲出の蕪村の句は、「春の海は、一日中のたりのたりと、のどかに物憂げにのたうっているよ」と、言う意味であり、この「のたりのたり」という擬態語が、この句の生命となっている。場所は須磨の浦だといわれており、「春の海」の本質を把握した純粹詩として、当時から世評は高かった。しかし、物の本によれば、後の評価は賛否両論に別れ、河東碧梧桐は、抽象化とその機知性が目立つとして否定的であり、水原秋桜子も全面的に否定した。それに対して、荻原井泉水は音律的観点から、中村草田男は「大らかで、童心に通じるものがある」と、高く評価している。

師・八木健の句は、この「のたり」とした「怠けぐせ」が治らない春の海の悠久を、賛美して擬人化。心と体で感じた「ああ」というインパクトな感動を写生に徹して、哀感の透ける見事な滑稽句に仕上げている。